



小笠原諸島世界自然遺産 地域の現状（概説）



1. 陸産貝類の保全（兄島）～重要保全エリア～

取扱注意

＜2月以降緊急対応を実施してきたエリア＞

優先して保全する希少種から重要保全エリアを選定



2月～ かごわなによるネズミ捕獲



8月下旬～ バイトステーションの展開を開始

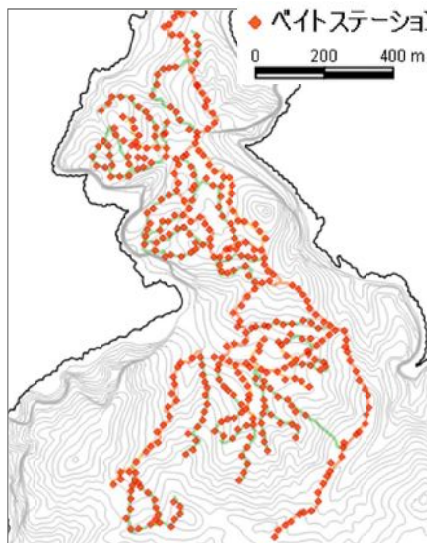


＜重要保全エリアの位置付け＞

実際には、**全域の保全**が必要であり、**重要保全エリア**だけを守ればよいという性質のものではない。
全域の保全が困難な状況の中で、希少種の分布域等から、**やむを得ず優先順位**をつけた。
ヤマキサゴ類の多数の同胞种群の存在は無視している（これらを守るには全域の保全が必要のため）、重要保全エリア外を放置することによって、**実際にどれだけのヤマキサゴの種が絶滅するか、現時点では分からない。**

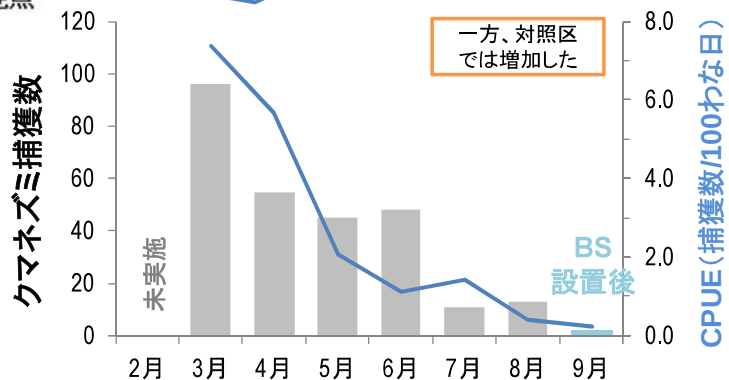
1. 陸産貝類の保全（兄島）～ベイトステーションによる対策の状況～

＜尖山の例＞

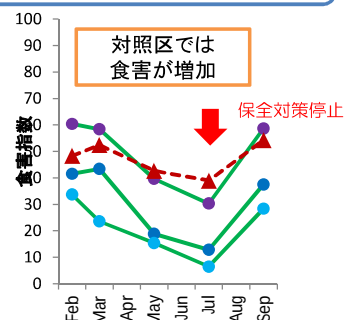
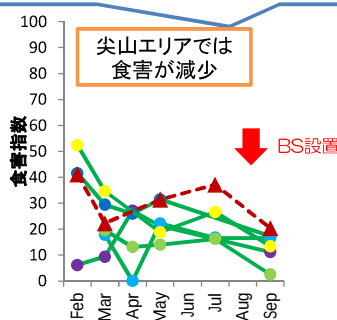


- 設置に先立ち、作業動線を増設
- 各作業動線で、25m間隔にベイトステーション (BS) を設置
- 殺鼠剤（ダイファシノン製剤スローパック）使用量は 3kg以内/ha・回
- BSは平均 8個/haの密度で設置、殺鼠剤充填量は 300g/個
- 約10日間に1回点検

設置1カ月で、ネズミを低密度化できた



陸産貝類も、若干の回復傾向が見られた



1. 陸産貝類の保全（兄島）～2月以降の緊急対応状況の最新情報～

＜陸産貝類の状況＞

- 2月以降、カゴわなによるネズミの捕獲を実施。カゴわなの有効範囲では、ネズミをある程度減らせたかもしれないが、ごく一部の地域にすぎず、兄島の陸産貝類を危機的状況から救うには至っていない。
- 上記と、殺鼠剤の環境影響の検証より、環境負荷が少なく、カゴわなより効果的な方法である、ベイトステーションの使用が提言された。
- 8月末以降、ベイトステーションを稼働。稼働1か月後の結果から、ネズミの低密度化、陸産貝類の回復が確認できた。ただし、対策の効果が出ていないエリアがあり、対策の強化が必要。



＜今後の予定＞

12/17 第4回小笠原諸島ネズミ対策検証委員会

- 実証試験の進捗経過の報告、検証結果の取りまとめ（案）の作成

1～2月 第3回兄島陸産貝類保全プロジェクト会議

- 兄島全域での対策を想定した、次年度の対策検討

1. 陸産貝類の保全（父島）～プラナリア防除対策と域外保全～

＜域内保全＞

父島島内でプラナリアが確認されていないのは鳥山と巽崎地域。プラナリアの侵入防止、ネズミ食害への対策検討などを進めている



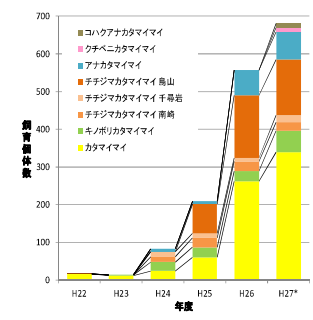
＜域外保全＞

個体レベルでの保護

室内飼育施設での繁殖

屋外飼育施設での繁殖

保全目的の移植（再導入等）



管理に人手のかからない手法を開発中

激減している父島島内の陸産貝類（及び兄島の一部個体）を野外から緊急的に回収し、保全目的の移植も視野に入れつつ、域外保全を行っている。

1. 陸産貝類の保全（母島）～ツヤオオズアリ防除対策～

ツヤオオズアリ

- 父島及び母島に分布

平成27年3月～ 母島における分布調査（環境省、東京都、小笠原環境計画研究所）

- ・集落地では広範囲に分布、それ以外では局所的に分布

平成27年6月 母島・南崎におけるモニタリング調査（東北大）

- ・ツヤオオズアリ侵入エリアでは、これまで多数確認されたノミガイ類が極端に少なく、捕食された可能性が高い。

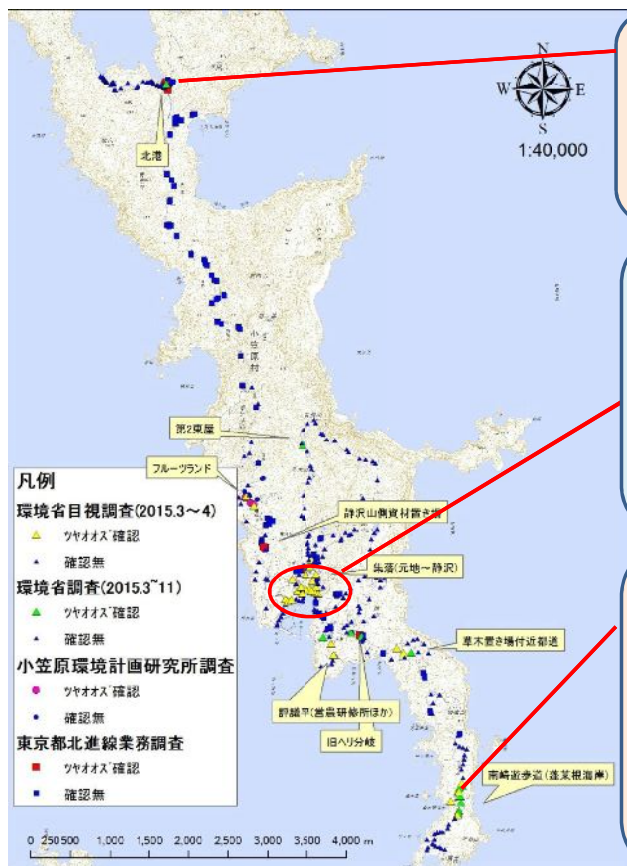
→新たな外来種の侵入・拡散防止に関するWGが対策の必要性を指摘

その後の調査（自然環境研究センター）

- ・在来アリを駆逐
- ・カイガラムシにアテンド



1. 陸産貝類の保全（母島）～ツヤオオズアリ防除対策～

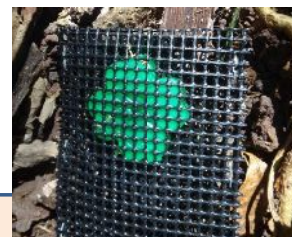


北港（東屋周辺）

- ・10月下旬から2カ月
- ・市販のベイト剤を5m間隔で150箇所を設置
- ・北港の分布域から防除予定

集落・農地周辺

- ・建設資材、農業資材等への付着
- ・島内の他の地域に拡散させない対策が必要

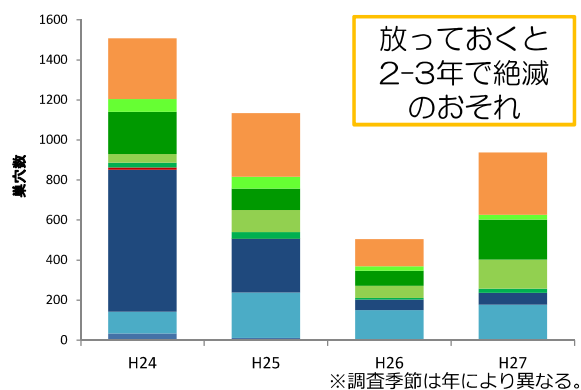


南崎（20m×20mの試験区）

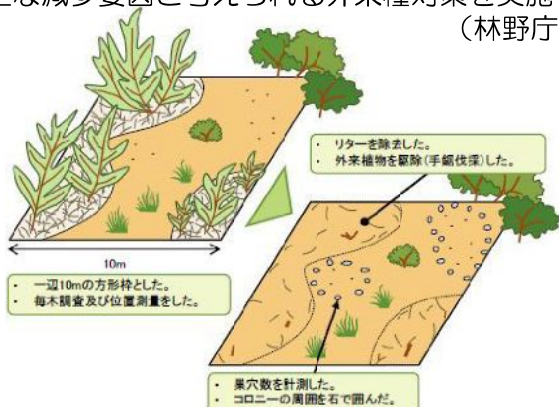
- ・10月10日から2カ月
- ・市販のベイト剤を3.3m間隔で設置
- ・森林内での効果測定（1か月で9割減少）
- ・非対象種への影響の低減・影響調査
- ・薬剤の土壌残留の分析

2. 希少昆虫類の保全（オガサワラハンミョウ）

兄島10地点（定点）における巣穴数の推移



主な減少要因と考えられる外来種対策を実施中（林野庁）



①内地での生息域外飼育

現在、3施設で約600匹を飼育中

②父島での飼育体制の構築

今年2月に開始。
成虫・幼虫合わせて
約100匹を飼育中。
2月に飼育し始めた
個体の羽化→産卵→
孵化に成功。



③野生復帰の実施

- ・内地の飼育個体の野生復帰を、病原体の持ち込みリスク等を検討した上で実施
- ・10月上旬に実施。今後、定着状況をモニタリングする



2. 希少昆虫類の保全（オガサワラシジミ）

H26年春、生息状況が危機的であると判断し、緊急対応を実施

H26に実施した緊急対応

一時捕獲・採卵



室内飼育



蛹を野生下に戻す

＜平成27年度の取組＞

新タ日ヶ丘では、アノール対策を強化するため、柵の補強工事を実施予定



緊急事態に備えて、多摩動物公園での累代飼育による種の保存のほか、母島で簡易に増殖できる方法を試行

・野生下では、卵からの羽化率は数%
→飼育により生存率を向上させ、より多くの成虫を野生下に戻す試みを実施

兄島のノウハウを導入



地元シジミの会による試行が行われ、13卵中、9卵羽化し、放蝶に成功



母島島内での簡易飼育

3. 平成27年度のアノール防除対策の全体概要

- ・探索、捕獲、遮断、再侵入防止に区分して、防除対策を実施。
- ・防除対策による生態系影響を評価

◆囲い込み柵
兄島全体の昆虫の生息状況を評価し、今後の囲い込み柵設置の考え方を整理した

◆Cライン
・分布域拡大に備えた昆虫生息地を保全するライン
・弟島への侵入リスク低減のため
次年度以降の柵の施工に向けて、設計が進められた

◆探索
分布域外縁部、Bライン以北での広域センサスを計61メッシュで実施

◆捕獲
南部分布域において、約40000個のトラップで捕獲事業を実施

◆Bライン
一部北側でも分布が確認されているが、南部個体群の拡散防止柵として、維持・管理

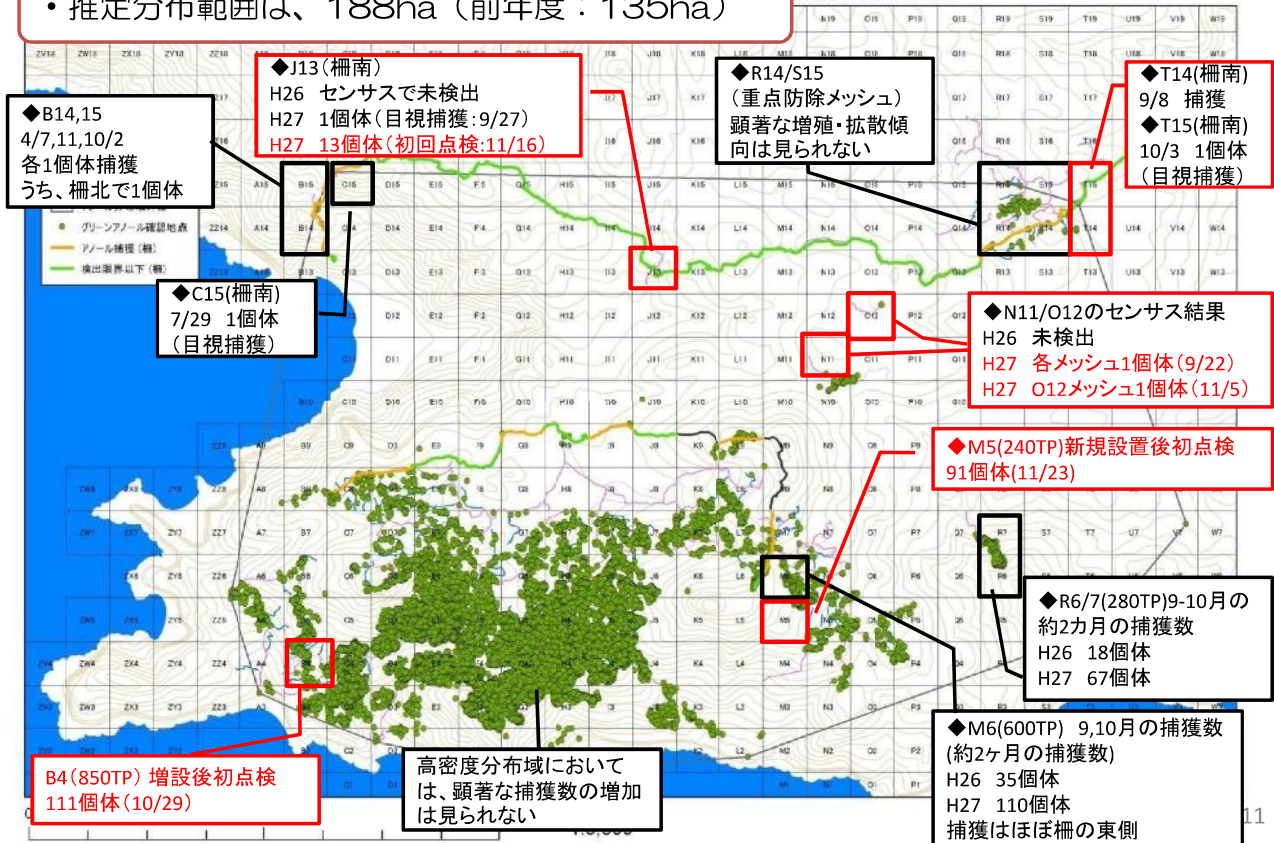
◆Aライン
南部高密度分布域の拡散防止柵として維持・管理



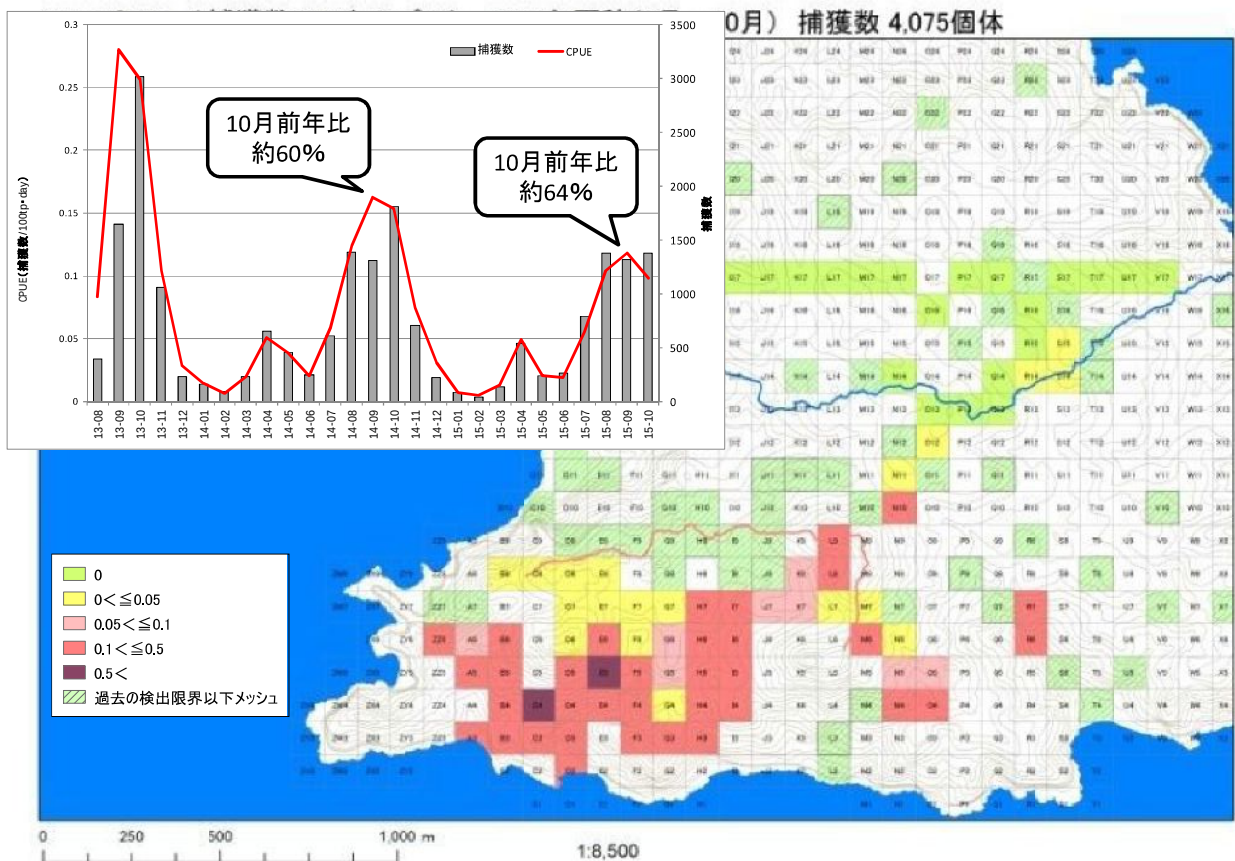
3. 兄島アノールの生息状況

・推定分布範囲は、188ha（前年度：135ha）

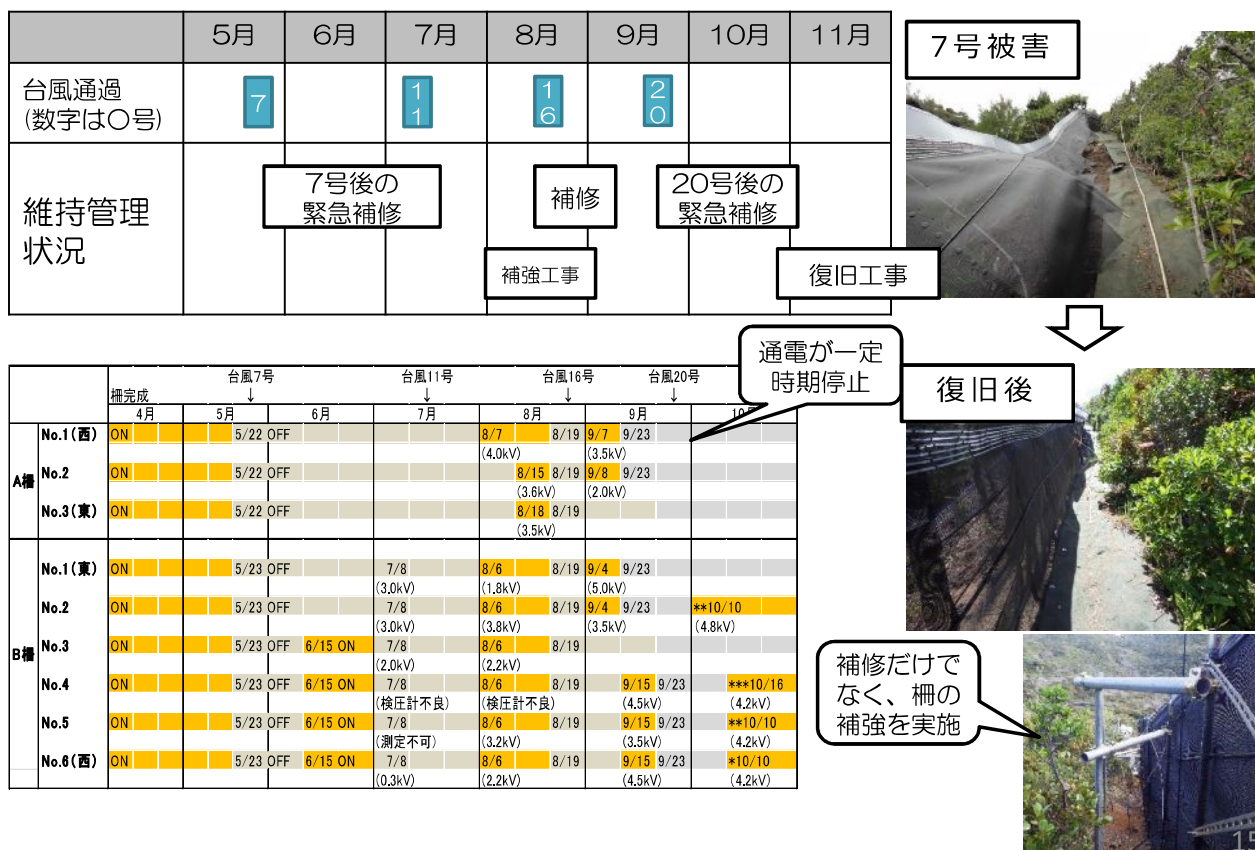
面積 188.46ha



3. アノールの捕獲対策の進捗状況



3. 遮断対策の進捗状況（A、Bラインの維持管理）



3. 捕獲対策（技術開発）

<父島での誘引試験>

- ・オレンジで**31個体**と最も多く、対照区（誘引試料なし）では最も少なく**7個体**のみの捕獲であった。
- ・粘着シートに付着した昆虫類（アリ・ゴキブリ・ハエ類）の割合を見ると、各試料での捕獲数と類似した傾向が見られた。
- ・昨冬誘引効果が認められた、トタンの樹幹巻き付けトラップを、兄島に導入予定。

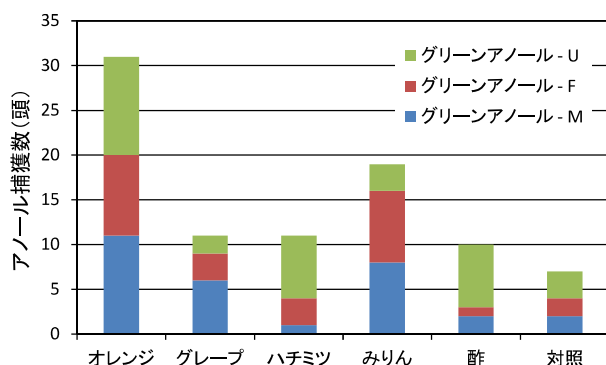


図. 各試料ごとのアノール捕獲数



3. 化学防除技術の開発

○推進費研究において2016年度末までに次のことを予定

- ・昆虫(ハエ類)の選択と養殖手法の確立
- ・薬剤(天然ピレスロイド系殺虫剤)の選択、生態リスク評価
- ・装着方法の試行
- ・網室(3×3×高さ4m)内での半自然条件下でのアノール捕殺

■その後の課題

- 技術的課題： 薬剤のカプセル化、装着方法
- リスク評価： バイト昆虫と薬剤の環境リスク管理
- 地元住民・関係者間の合意形成

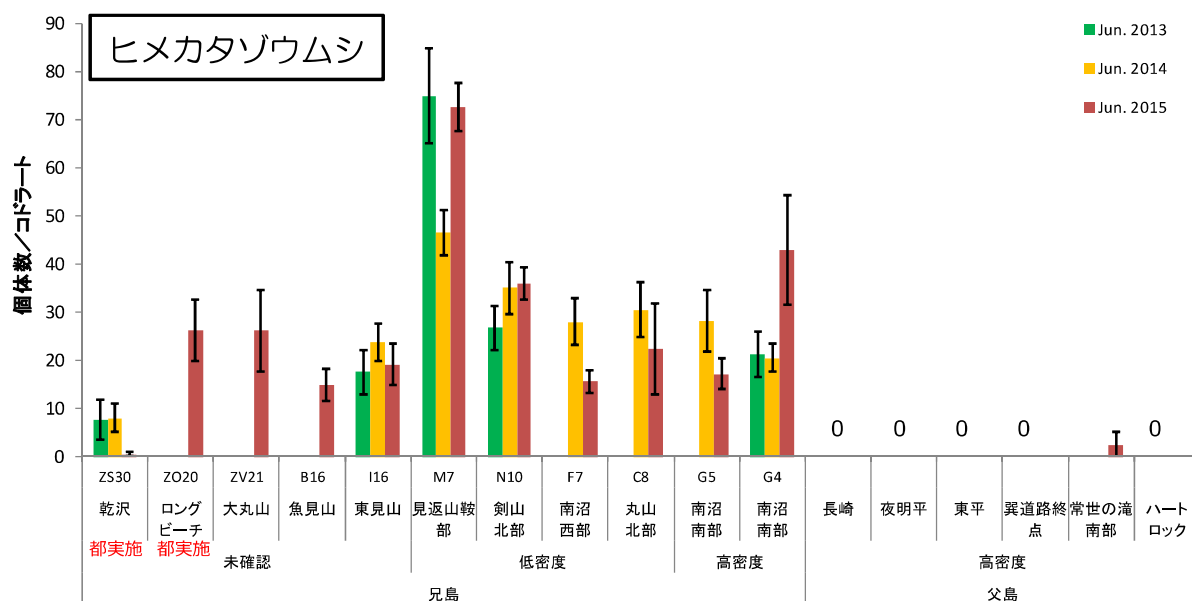


17

3. 生態系への影響評価【保全対象の状況】

いまのところ、アノール分布確認の有無による顕著な差は見られていない。

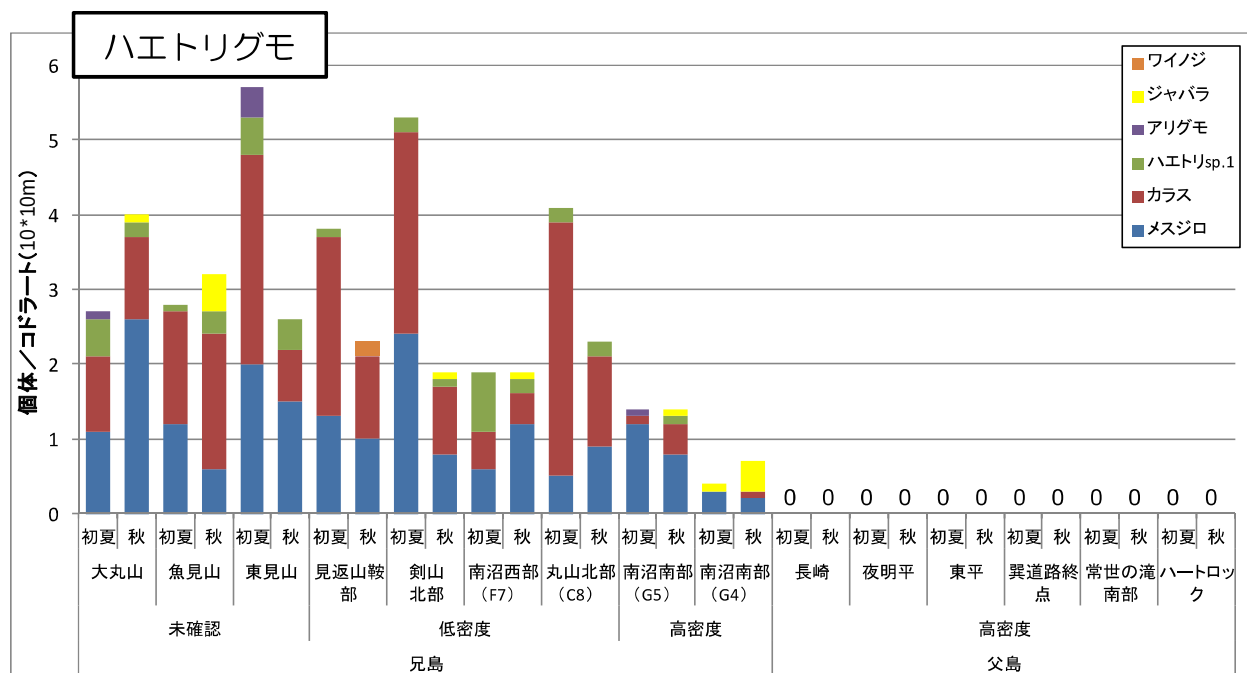
- 兄島においては、昨年同様、アノールの生息域で捕獲数が極端に少ない状況は見られなかった。
- 父島においては、殆ど捕獲がなく、南部の高木林内で僅かに確認されたのみである。



18

3. 生態系への影響評価【保全対象の状況】

- ▶初夏(6月)と秋(9月)に調査を実施した結果、兄島では6種のハエトリグモが確認されたが、父島では全く確認できなかった。父島の個体群は壊滅的な状況にある可能性が高い。
- ▶兄島内ではアノール高密度地域で若干少ない傾向が見られた。地形・植生の違いによる可能性もあるが、アノールやトラップによる影響も否定できないため、特にトラップ密度の高いG4については今後も注意が必要。

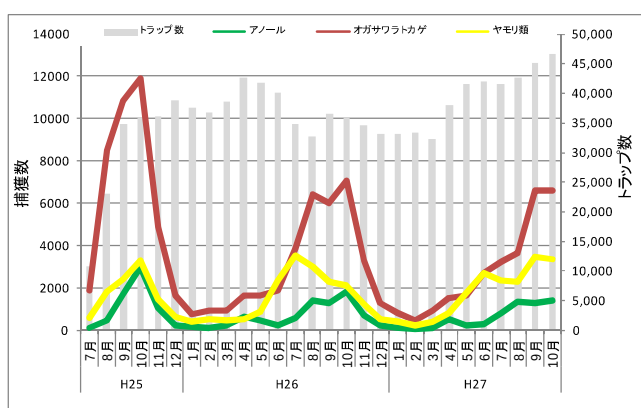


※各地点10コドラートで調査を実施し、平均値を算出。

19

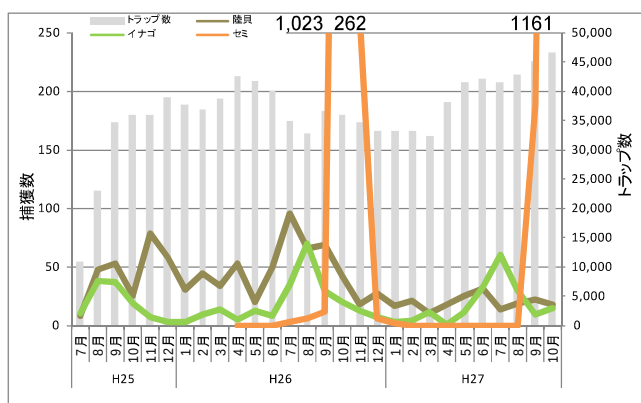
3. 生態系への影響評価【捕獲対策による影響】

＜粘着トラップにおける目的外捕獲の状況＞



	H25年度	H26年度	H27年度	計
オガサワラトカゲ	42,347	35,301	26,044	103,692
ヤモリ類	11,621	17,520	16,725	45,866
陸貝(生死区別せず)	377	486	146	1,009
アニジマイナゴ	139	216	157	512
オガサワラゼミ	記録対象外	1,318	1,349	2,667

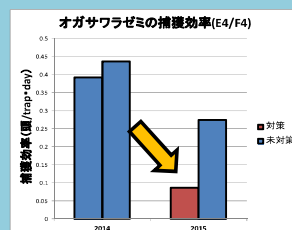
(※H27年10月31日時点)



個体群への影響の他、遺伝的な影響や、混獲防止技術の開発を実施



オガサワラゼミの混獲防止の取組



20

3. 生態系への影響評価【植生への影響】

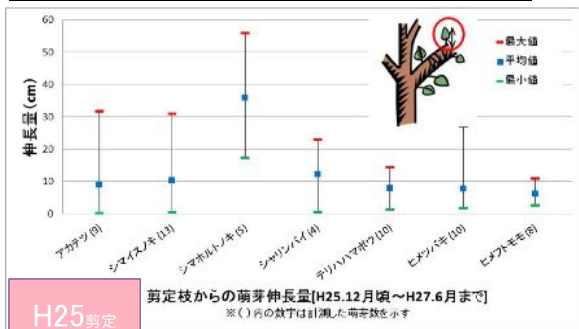
萌芽再生状況調査結果(H25プロット設置箇所)

H25に伐採・剪定後、1年半経過

- ・伸長量は樹種間だけでなく、同一樹種内でも異なる。
- ・樹種による差はあるが、枝剪定後の枯損率は平均で23%、切株からの萌芽の枯損率は32%という結果であった。

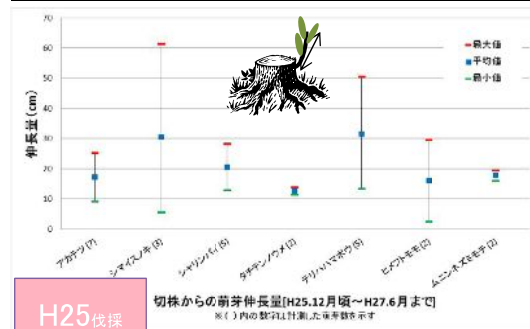
【剪定枝調査結果】

樹種	調査総数	生残	枯死	不明	枯損率(%)
アカテツ	10	9	0	1	10.0
シマイスノキ	20	13	6	1	35.0
シマホルトノキ	5	5	0	0	0.0
シャリンバイ	5	4	0	1	20.0
テリハハマボウ	10	10	0	0	0.0
ヒメツバキ	16	10	4	2	37.5
ヒメフトモモ	11	8	1	2	27.3
計	77	59	11	7	



【切株調査結果】

樹種	調査総数	生残	枯死	不明	枯損率(%)
アカテツ	9	7	0	2	22.2
シマイスノキ	5	3	2	0	40.0
シャリンバイ	10	5	0	5	50.0
タチテンノウメ	3	2	1	0	33.3
テリハハマボウ	6	5	1	0	16.7
ヒメフトモモ	3	2	1	0	33.3
ムニンズミモチ	2	2	0	0	0.0
計	38	26	5	7	



兄島の在来植生に対する明瞭な影響（林内への枯れ込み、外来植物の顕著な増加等）は確認されておらず、対策終了後の植生回復は可能と考えられる。

21

3. アノール防除対策の現状評価

昆虫の生息状況	現状、兄島の昆虫群集は良好な状態に保つことができています。
分布域の拡散傾向	これまでの未検出地点での新たな分布確認や、過去捕獲の少なかったメッシュで捕獲数が増えていることから、拡散傾向が認められる。 捕獲により密度低減が図れていることから、アノールの密度が飽和せず、餌資源が良好であっても、アノールの分布域は拡大する可能性がある。
捕獲	密度低減の数値目標について、現状昆虫相に影響がでていないことから、昆虫の生息状況を良好に保つためのアノールの低密度化は、捕獲エリア全体としてCPUE0.2を維持することで達成できると考えられる。また、概ね800個／メッシュ以上のトラップを設置すれば、目標は達成可能である。 超高密度のトラップ設置による局所的な根絶状態は達成できておらず、根絶の目処は立っていない。
柵の効果	拡散傾向は認められるものの、Bライン以北の分布確認地点は限られていることから、防除柵による拡散防止機能が機能していると評価できる。ただし、機能維持のための強度や、復旧体制に課題がある。 アノールの跳躍実験から、現在の伐開幅の考え方は、樹高3m以上の高木林では、不十分なおそれがある。

22

3. 今後の防除対策の目標設定（ロードマップでの目標設定）

<最終目標（理念）>

小笠原諸島からのアノールの完全排除。それによって、昆虫を始めとする生態系を保全・再生する。

<短期目標（3年間）>

全体には昆虫の良好な状態を維持しつつ、最終目標の達成に向けて、以下の達成を目指す。

④防除技術の開発

- ・①で構築した技術の、広域展開
- ・5年間で、野外で活用できる化学防除技術を開発する。

①Bライン以北でのアノール分布域の消滅

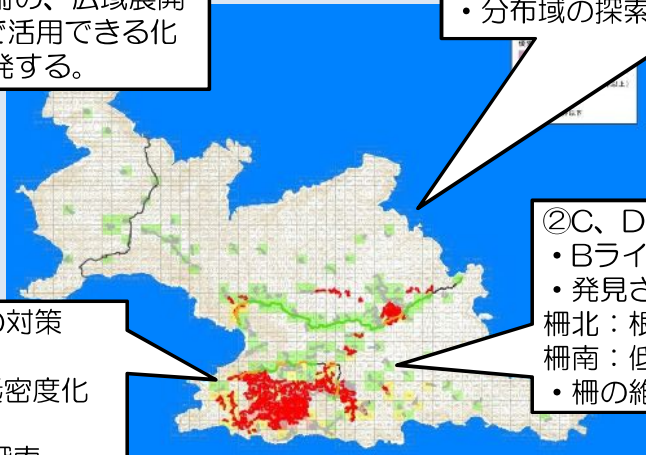
- ・局所的根絶状態の達成
- ・分布域の探索、探索技術の向上

②C、Dエリアへの拡散防止

- ・Bライン周辺での探索
- ・発見された場合、
柵北：根絶状態の達成、
柵南：低密度化（CPUE<0.05）
- ・柵の維持管理、Cラインの設置

③Bライン以南での対策

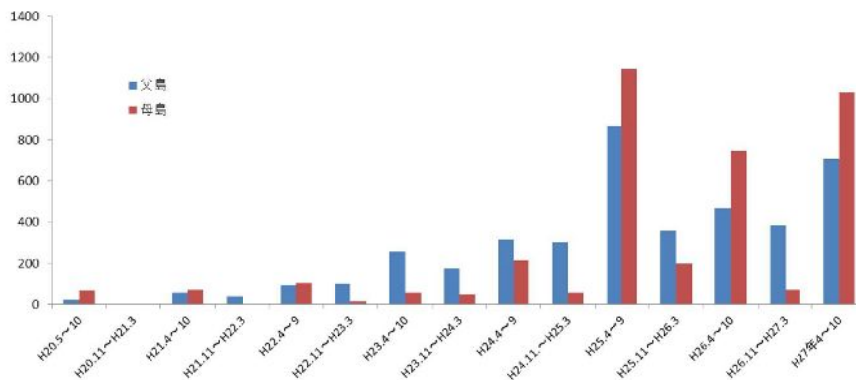
- ・Aエリア：
CPUE<0.2に低密度化
- ・Bエリア：
高密度分布域の探索



23

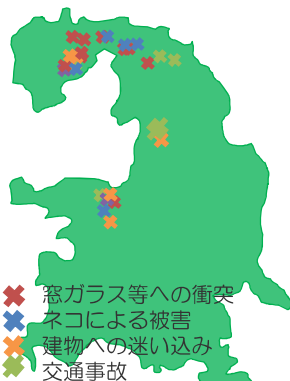
4. アカガシラカラスバト保全対策

アカガシラカラスバトの目撃情報数の推移



出現数の増加に伴い、事故が増加。平成27年に入ってから、7件の事故が発生（父島5件、母島2件）

事故防止対策の実施



過去4年間の父島における
トラブル発生場所



交通事故防止
注意喚起看板の設置



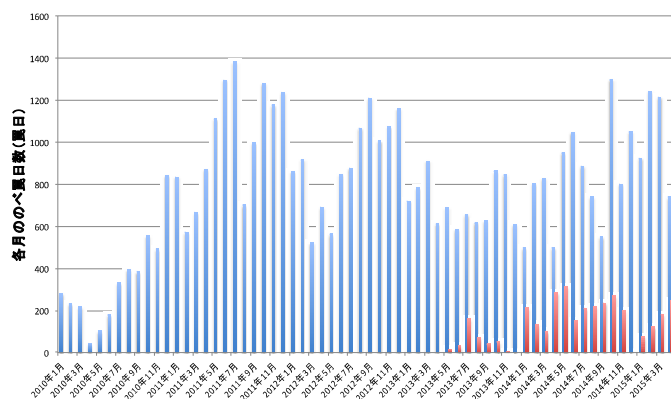
バードセイバーの設置

5. ほ乳類・鳥類の保全：ノネコ対策

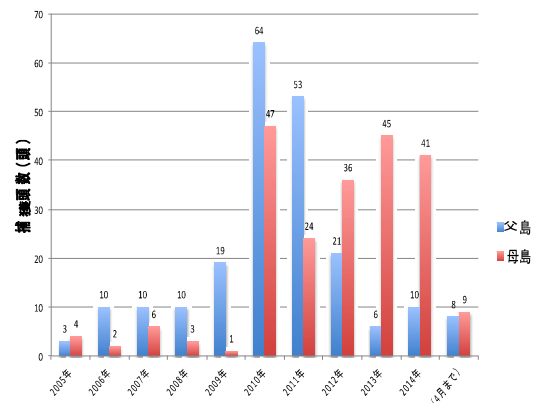
＜ノネコ対策の課題＞

- ・父島における根絶状態の達成（難捕獲ネコへの対処）
- ・母島における低密度化の達成（今年度、本格捕獲へ移行中）

→小笠原海運、東京都獣医師会の協力を得て行っている内地搬送が円滑に進むよう普及啓発等により、受け入れを促進する。



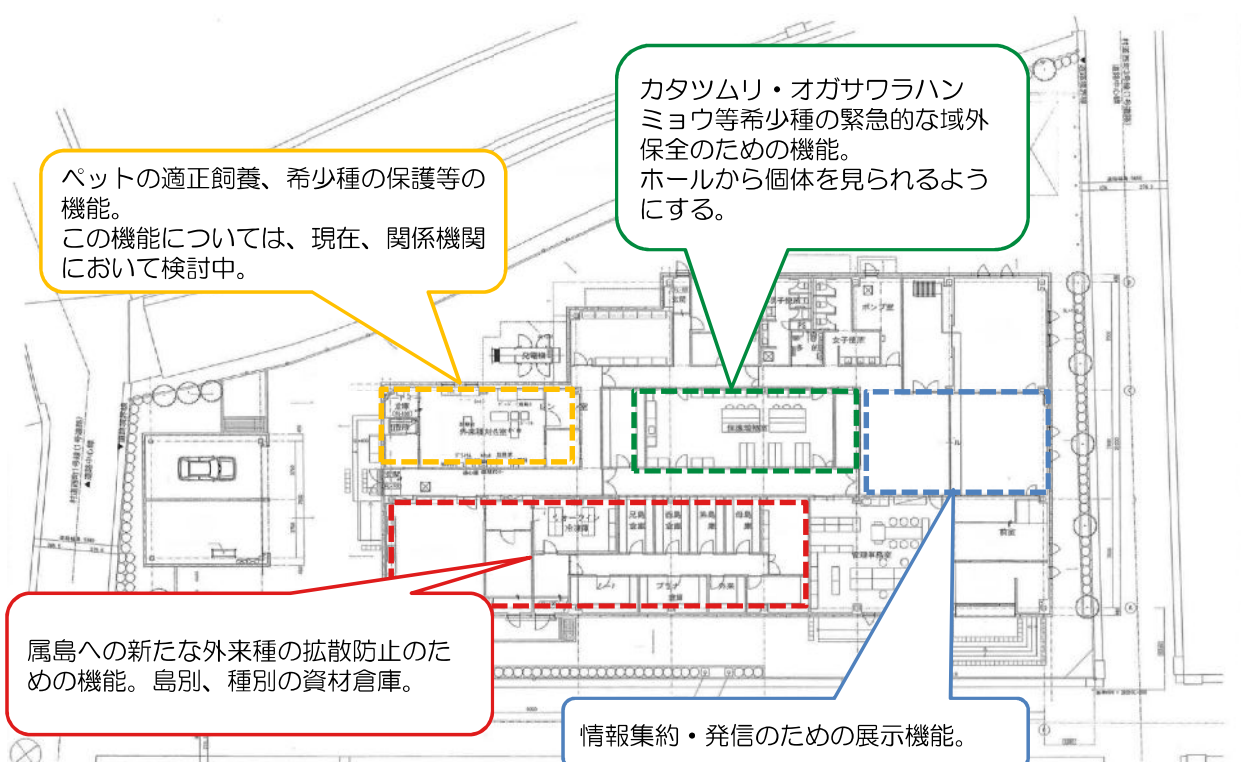
父島母島における捕獲努力量



父島母島における捕獲頭数(各年)

※林野庁および東京都事業での捕獲を含む。

6. 世界遺産センター（仮称）の整備予定



6. 世界遺産センター（仮称）の整備予定

＜世界遺産センターが備える4つの機能＞

- ① 父島における外来種検査・処置機能
- ② 父島における保全事業にかかる機能
- ③ 情報集約・発信機能
- ④ 管理運営機能

OH27年度	OH28年度
【6月1日】 土地の所管替え（財務省→環境省） 【7月末】 設計変更後の図面及び積算 【8月下旬】 【10月上旬】 工事の入札公告 【11月下旬】 工事の落札	工事の完成、備品の搬入、引越
	OH29年度
	【4月1日】 供用開始

7. 森林生態系保護地域（国有林）における平成27年度の取組 ①

1. 固有森林生態系の修復事業

小笠原諸島固有の森林とそこに生息・生育する動植物を含む森林生態系を修復することを目的として、在来動植物の生息・生育状況、ダム集水域との位置等に配慮したアカギ・モクマオウなど外来植物の伐採・駆除・稚樹の抜き取りなどを行うとともに、その箇所の事前・事後モニタリングなどを実施。

【外来植物の駆除実施箇所（区域面積：約55ha）】

父島、弟島、兄島※、西島、東島、母島、向島

※兄島については、オガサワラハンミョウの新たな生息地を試験地として設定し、モクマオウ等の駆除を実施。



周辺の在来樹木などを傷つけないよう外来樹木を先端から少しずつ伐って、ロープで下ろしていく「特殊伐採」という方法も活用している。

2. アカガシラカスバト・オガサワラカワラヒワ保護管理対策調査事業（母島）

母島列島に生息するアカガシラカスバト・オガサワラカワラヒワの生息地の保全・管理対策を検討するため、母島の国有林内（石門、桑ノ木山、乳房山）において、足輪の装着、人工水場の管理、センサーカメラやICレコーダーによる確認など実施。また、石門地域では、アカガシラカスバト等を捕食する恐れがあるノネコ捕獲を実施。



7. 森林生態系保護地域（国有林）における平成27年度の取組 ②

3. オガサワラノスリ保護管理対策調査事業(新規事業)



小笠原諸島にのみ分布するオガサワラノスリの生息に配慮した森林生態系の保全・管理を行っていくため、これまでに行われた調査結果の取りまとめや、不足している生息情報を収集するための調査を行い、外来動植物の駆除等による生息環境の変化がオガサワラノスリに及ぼす影響の分析を実施。

4. オガサワラグワの試験的植栽（父島）

（（国立研究開発法人）森林総合研究所林木育種センターと共同）

絶滅危惧種オガサワラグワの個体数は年々減少しており、林木育種センター（茨城県）がその保全の取組みとしてこれまでに父島から持ち帰って育てたオガサワラグワの苗木について、父島の振分山・桑ノ木国有林内への試験的な植栽を実施。



5. 小笠原諸島森林生態系保護地域指定ルートモニタリング事業

森林生態系保護地域の指定ルート（父島・母島（南島・石門を除く。）、賀島）の路面状況や利用による周辺の生態系への影響などを検証するため、平成21年度に設置した調査ポイントにおいて植物の踏みつけ・折損、土壌の流出やオガサワラスナハキバチの生息状況調査等を実施。

7. 森林生態系保護地域（国有林）における取組 ③

6. 小笠原諸島における森林生態系保護管理手法の開発

父島列島全体の森林生態系を一体的に維持・復元していくため、主に父島・兄島・弟島を対象として、モニタリング調査等によって固有種と外来種の種間関係の解明を進め、国などの関係機関が希少な動植物の保全や外来動植物の駆除を効率的・効果的に実施する上で必要な基本的な考え方を検討。

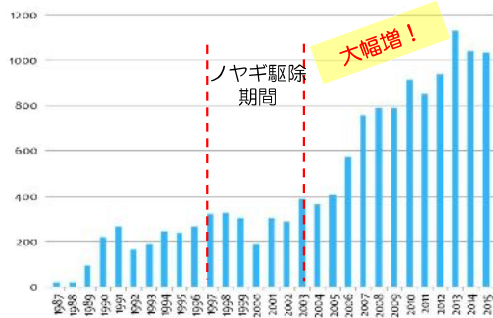
7. その他

- 父島・母島において、自然保護管理員や森林保護員（愛称「グリーン・サポート・スタッフ（GSS）」）による巡視・観察、普及啓発を実施。
- 東平アカガシラカスラバトサンクチュアリーの木道の修理、普及啓発を実施。
- 饅頭岬（父島）において、裸地化・衰退した植生により土壌流出した後の森林への誘導を検討するため、近隣の林から在来種（タコノキ）の移植及び種子採取・播種の試験的事業（防食ネット設置も含む）を行った箇所のモニタリングを実施。
- 関東森林管理局東京事務所の公募による「母島ボランティア」や学校などによるアカギ、キバンジロウなどの外来樹木の駆除を実施。



8. 聟島列島におけるノヤギ駆除後の海鳥類の増加

- ノヤギ駆除後、アホウドリ類やカツオドリなどの海鳥類の繁殖数が飛躍的に増加



○クロアシアホウドリ繁殖数の推移（聟島列島）

○その他の海鳥繁殖組数の変化（娘島）

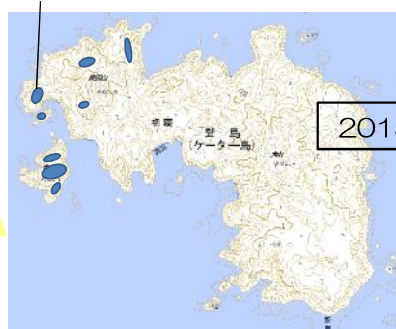
	2002年	2008年	2011年	2014年
カツオドリ	400	900	635	800
オナガミズナギドリ	10	1000	1000	1700
アナドリ	0	0	9	26

大幅増!

○クロアシアホウドリ営巣地の拡大



★アホウドリ新繁殖地の形成事業地
2012年度から3期連続してペアリング・抱卵



★アホウドリ雛（2014年）及び
アホウドリペア（2015年）確認エリア

9. 父島におけるノヤギ対策と外来植物対策



ノヤギの群れ（父島）

- 小笠原ではノヤギについて、植生破壊や土壌流出被害などをもたらす外来種として、これまで各島で根絶を実施し、現在は父島のみにノヤギが生息
- 父島ではノヤギ駆除6年目であり、これまでに大幅に頭数を低減

＊平成22～26年度の5年間で約2500頭
（東京都及び環境省。小笠原村の有害鳥獣駆除を含む）

- ノヤギを根絶した島では徐々に自然回復が進む一方、外来植物の繁殖拡大も見られ、ギンネムやモクマオウなどの駆除を実施
- このような状況から、父島でのノヤギ駆除を従来どおりのペースで進めることを不安に思う意見もあり、今後父島でのノヤギ対策と外来植物対策をどのような方針で進めるべきか検討中



海岸部のモクマオウ（兄島）

10. 南島におけるネズミ対策

○これまでの経緯

- 平成21年度 **ネズミ被害**と考えられる**アナドリ成鳥の死骸**を発見
*平成22年度にも食害を確認
- 平成24年1月 **手撒き及びバイトステーションによる殺鼠剤でのネズミ駆除実施**
⇒ネズミ類の確認は0に
- 平成25年10月 センサーカメラによりネズミの生息を確認
- 平成26年12月 **バイトステーションによる殺鼠剤でのネズミ駆除（密度低減策）を実施**
*ただし、殺鼠剤使用に関する説明不足等を背景に、翌年1月にバイトステーションを撤去
- 平成27年7月 **アナドリの4卵にネズミ食害**を確認
- 9月 **ネズミ食痕のあるアナドリ雛死体**を確認
⇒ **海鳥被害が拡大するおそれ**
- 9月 南島植生回復調査（ネズミ対策）検討委員会にてバイトステーション（⇒ 写真）を用いた早期のネズミ駆除開始方針を確認
- 11月 駆除計画案の村民説明会開催



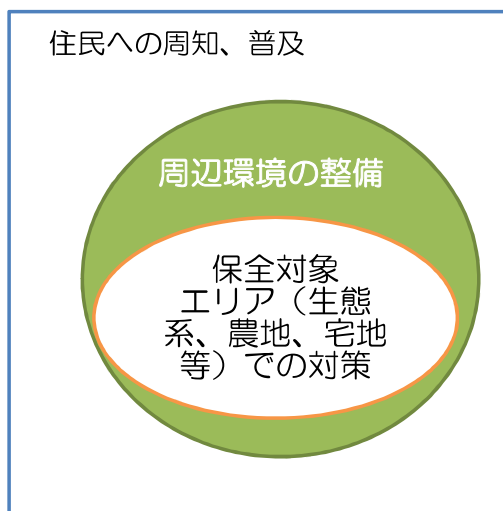
○今後の予定

12月中旬以降、来年2月末までの間、ネズミ駆除を実施

11. 有人島のネズミ対策

有人島で現在行われている取組

様々な取組をあわせて行う



◆保全対象エリアでの対策

- ・ 囲い込み
- ・ 殺鼠剤の使用、トラップの設置
- ・ ゴミの除去

◆周辺環境の整備

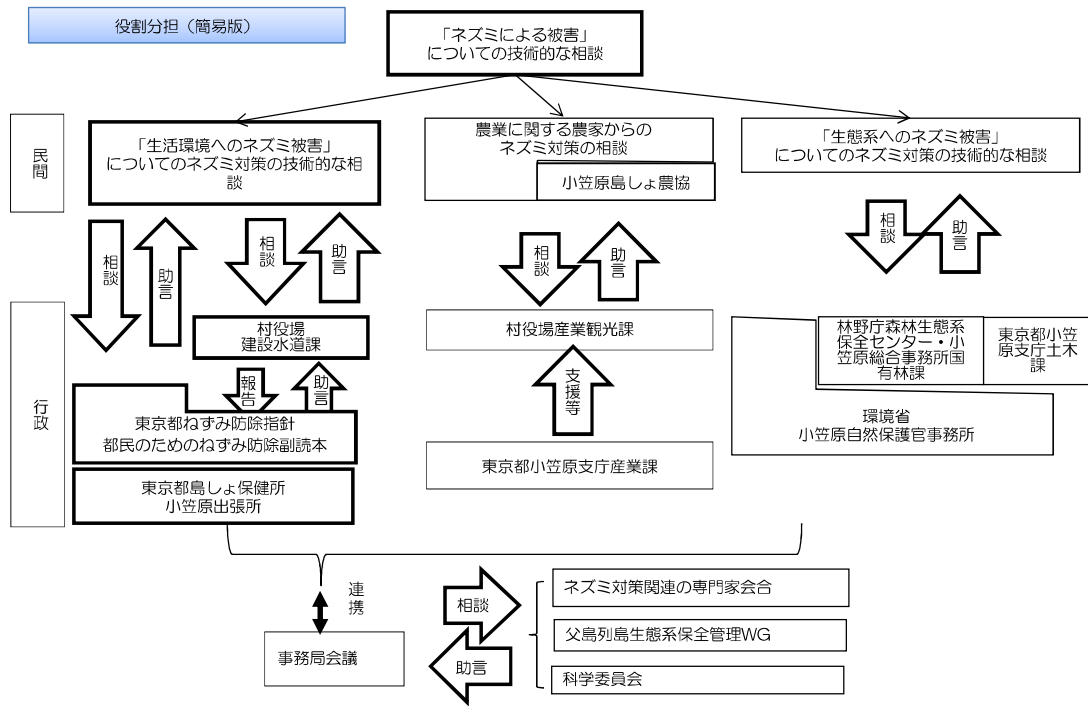
- ・ 草刈り
- ・ 轢死体の除去
- ・ 殺鼠剤の使用、トラップの設置

◆住民・農家への周知、技術普及

- ・ パンフレット、チラシ等の配布
- ・ 相談窓口の設定

◆殺鼠剤の補助率 4割→5割

11. 有人島のネズミ対策



平成27年11月30日 「有人島におけるネズミ対策にかかる行政連絡会」を開催

- ・世界遺産管理機関以外の各担当部局の知見の集約
- ・有効な一斉取組の方法について検討

12. オガサワラオオコウモリの人との軋轢の解消

1. 人とオオコウモリとの軋轢

- (1) オオコウモリが人に与える影響 (2) 人がコウモリに与える影響
(3) ねぐらの管理 (4) 餌資源の確保

2. 小笠原オオコウモリに関する地域的な課題

オガサワラオオコウモリとの共生を図るため、

- ・短期的には、人とオガサワラオオコウモリとの軋轢を解消するための取り組みを進める。
- ・長期的には、オガサワラオオコウモリが在来生態系の中で生息できる環境を整えていく。

柑橘・果樹へのネットの設置



24年度実績	3件	223m ²
25年度実績	4件	728m ²
26年度実績	11件	1,440m ²
27年度予定	12件	2,508m ²

餌資源の確保

モモタマナの植樹



- ・餌の枯渇しやすい冬の餌資源として期待される海岸植生再生（父島・小港）
- ・在来植生の再生と、再生までの一時的な餌資源としての嗜好性の高い餌の確保（父島・洲崎）

13. 人とペットと野生動物が共生する島づくり

○愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散に関する地域課題 ワーキンググループの設置

背景：「新たな外来種となり得るイヌ、ネコ以外の愛玩動物への対応」の必要性

WGの目的：「小笠原に相応しい愛玩動物の適正な飼養のあり方、共生の姿を議論し、ひいては生態系被害等を防止し、世界自然遺産の価値の保全を図る」

構成メンバー：行政機関 環境省、林野庁、東京都、小笠原村
地域連絡会議構成団体 小笠原自然文化研究所、父・母観光協会、野生研他
その他関係団体等 小笠原海運、飼い主の会、保健所獣医師、島内獣医師
外部アドバイザー 東京都獣医師会

○経過と今後の予定

- ・平成27年10月5日：第1回WG開催
- ・平成27年10月17日・11月12日：村民意見交換会での意見交換
- ・平成27年11月17日：第2回WG開催
- ・平成28年2月頃：第3回WG開催



<成果目標>

- ・「小笠原村における愛玩動物対策の基本的考え方」のとりまとめ

14. 地域との情報共有

1. 現場視察会等の開催

- ・小笠原の自然に対する村民の興味を深めてもらい、また村民と世界遺産の課題を共有し、地域と連携した世界遺産の保全の取り組みを進めることを目的として、平成25年度から継続して開催。
- ・兄島では、実際に、陸産貝類・水生生物・昆虫などの保全対象や、対策の現場を体感してもらうプログラムを実施した。

実施日	参加人数	対象	場所
H27.4.8	8名	地域連絡会議	兄島
H27.5.6	20名	一般村民	兄島
H27.5.9	19名	一般村民	母島南崎
H27.7.5	19名	一般村民	兄島



兄島視察会の様子

2. 村民ボランティアによる外来種駆除作業（東京都他）

- ・平成13年度より南島等での外来植物駆除ボランティア作業を継続

3. 環境教育に関する取組（各機関）

- ・学校教育との連携
- ・社会人を対象とした取組
- ・島外からの学生を対象とした取組



母島マイマイ観察会の様子

4. 世界自然遺産に関する村民意向調査の実施

- ・ 村民が世界自然遺産に関して、肌で感じていることを広く把握し、遺産に関する取組を進めていくうえでの参考とするためアンケート調査を実施。

対象	小笠原村の全世帯	村内中高生
配布数	1,330(世帯数)	109(生徒数)
調査期間	9月11日～30日	9月14日～25日
有効回答	847	106
回答率	63.7%	97.2%

[illegible]

5. 村民意見交換会の開催

■日時：父島 10月17日 母島 11月12日

■参加者：父島 31名（村民19名、事務局関係者12名）
母島 24名（村民17名、事務局関係者7名）

■議題：

1. 世界自然遺産に係る各機関の取組紹介
2. 世界自然遺産に関する村民意向調査（結果速報）
3. ワークショップⅠ：遺産登録100年後の小笠原 ～登録5周年を前に～
4. ワークショップⅡ：動物と暮らすということ ～ペットとの付き合い方～



意見交換会の様子